

チベット文献研究への道しるべ (二)

稲葉 正 就

三、チベット佛教学（ラマ教学）に関する 文献の研究

既に述べた如く、チベット文献には、チベット大蔵經と藏外文獻とが現存する。

先ずチベット大蔵經を見ると、それに収められている佛典の数が漢訳大蔵經のそれより断然多い。というのは実は密教関係の經や論のチベット訳が多く収められているからである。これら密教佛典は、もちろんインド密教の經論をチベット語に翻訳したものである。しかもインドの後期密教に関するものが大多数を占め、これらは中国に伝わらず、したがって漢訳大蔵經の中に収録されなかつたのである。このインド後期密教の研究には、チベット大蔵經は多数の資料を提供してくれているにもかか

わらず、従来殆んどなされていないといつてよい。

次にチベット藏外文獻であるが、それには一層密教関係のものが多し。これら密教の論書は、チベット僧がチベット大蔵經に収められている密教の經論を研究し修習した後に著作したのであるから、インド密教に由来することはもちろんのことである。ところが、その中には、チベット古来のボンボ教と習合したものがあり、またチベットへ伝来してからチベットの高僧によって研究せられ、むしろチベットで発達したものも数多くある。これは、チベット独自の密教、いわゆるラマ教の教学を説述した論書となつたのである。わが国に伝わっている藏外文獻の数量は、大谷大学所蔵のものが四一〇四点（大谷大学図書館発行の西蔵文獻目録による）、東北大学所蔵のものが二〇八三点（東北大学発行の西蔵撰述佛典目録による）、

東洋文庫所蔵のものは目録が出版されていないので明確にわからないが、ほぼ前二大学の何れかに匹敵するほどであるようである。ところが、わが国に伝わっていないものがどれくらいあるか見当がつかないほど沢山あり、今もなおラマ僧によって著作されつつあるから、まさに無尽蔵といってよいかもしれない。

さて、蔵外文献の密教に関するものには、密教經典の註釈、概説、讃頌、時輪、儀軌、成就法、祈願文、請願文、書翰などがある。これらが、各宗派や学派によって解釈が多少相違するから益々複雑である。蔵外文献の中に頭教に関する論書もあるが、その数は少い。しかも単に頭教を研究した頭だけでそれらを理解してよいかどうか問題であろう。というのは、チベット佛教にあつては、頭教は密教へ入る方便であるから、その立場に立つて研究しなければならぬ。そうすると頭教関係のものも研究でも密教を知っている必要があることになる。そういうことになる、頭教だけを研究して来た者にとつて甚だむつかしい分野であるといわねばならない。事実、むつかしいからこの分野の研究は、殆んど手がつけられない。全く前人未踏といつてもよい分野である。しかも、無尽蔵に近いほどの文献がある以上、これを研究

しなければならぬ。たといそれを研究して何の益になるのかと反論する人があるとしても、益にならうがなるまいが、あたかもヒマラヤの連峰がそびえている以上、命がけでその頂上を征服しようとするのと同じであるべきであろう。

そこで、この分野に挑む人は、もちろんチベット語に熟達しなければならぬし、佛教学の分野に含まれるのであるからサンスクリットも知らねばならないのは、前述の一場合同じである。ところが更に困つたことには、密教用語が頻繁に出てくるばかりでなく、チベット独特のいわゆる宗学となつてゐるから、特殊な術語が多い。例えば、わが国の宗学の用語が他宗派の者にはわからないのと同様に、チベット独特の宗派の用語は、わが国の密教専門の学者でも理解に困られることがあると思ふ。というのは、わが国に伝わつた密教はインドの初期密教であるが、チベット密教は後期のものを主としていて、なおその上にチベットで出来た独特のものがあるからである。これらチベット密教の術語や文章は、既に出版されているチベット語の辞書には殆んど載つていない。辞書が駄目だとすると、何によつて読むのかということになるが、事実、全くお手あげの状態である。何の道具

も装備もなくしてヒマラヤの高峰へ登ろうとするようなものである。ではどうすればよいのか。それには先ず道具や装備を自分で考案しながら、第一歩から登る練習をするよりほかに方法があるまい。

そこで、第一歩からというところ、チベット密教はインド密教に由来するから、最初にチベット大蔵経の中に収められているインド密教佛典よりはじめるべきである。そのためにも、酒井真典教授著「チベット密教教理の研究」がよい手ほどきになる。また同教授の著作に「百光遍照王の解明」をはじめ、雑誌論文が沢山あるから、チベット訳本文と対照してチベット大蔵経の密教用語を会得するのがよい。

次に、チベット人が著作した密教佛典の研究に入らねばならない。それには先ず先輩が既に研究したもののより始めるのが得策であるが、チベット佛教の最も古いものを伝えるニンマ派 (Nin ma pa) の教義に対する成果はまだ発表されていない。また、サキャ派 (Sa skya pa) の教義に関する研究も皆無である。したがって、これら両派については、後まわしにした方がよいと思う。

そこで、順序としては少し妥当でないかもしれないが、H. V. Guenther の力作を頼りに、むしろカーギユ派

(Bkrah rgyud pa) から始めてはどうであろうか。それには先ず、第二世紀末頃の人と思われるリンチェナムギェル (Lhahi btsun pa Rin chen rnam rgyal) の著作を英訳した H. V. Guenther: "The Life and Teaching of Naropa. Oxford, 1963." を読むとよい。

これは、インド密教の高僧ナーローパ (Naropa or Nadapada, 1016-1100) の伝記の形式になっているが、実は史的事実というよりむしろ密教教理が詳しく説かれているから、教理の理解のために、よい参考になる。このナーローパのもとで学んだチベットのマルパ (Mar pa Chos kyi blo gros, 1012-1097) は、その教義を承継いで故国へ帰ってカーギユ派を創設した。マルパの弟子ミラレーン (Mi la ras pa) の弟子、すなわちマルパの孫弟子ガムポパ (Sgam po pa Dwags pal ha rje, 1079-1153) の著作 (東北蔵外 No. 6952) を英訳した H. V. Guenther: "The Jewel Ornament of Liberation. London, 1959." があるから是非読まねばならぬ。また Guenther は "Tantric View of Life. London, 1972." という成果を発表しているから、よい参考になるであろう。

さて次には、どうしてもカーダム派 (Bkrah gdams pa) の教義を研究せねばならないが、それにはアティシヤ

(Jo bo Atiḡa Dipankaragrjāna, 982-1054) の著作を
読まねばならない。何となれば、アティーシャの教えに
基づいて、その弟子ドムトン (Hprom ston) が創設し
たのがカードム派であるからである。アティーシャの著
作は、デリゲ版チベット大蔵経では最後に「アティーシ
ャ小部集」(東北目録 Nos. 4465-4567) としてまとめ取
められている。これはアティーシャの著作とその根源と
なった論書も含めたもので約百部あるから「百部集」
とも呼ばれる。北京版ではまとめずに秘密部と中観部の
中に収められている。これらに対する研究は、まだ殆ん
ど発表されていないが、最も重要な菩提道灯(大谷影印北
京版 Nos. 5343-5378; 東北デリゲ版 Nos. 3947-4465) は、

その自註であろうといわれる菩提道灯細疏(大谷影印北京
版 No. 5344; 東北デリゲ版 No. 3948) を対照して読むと一
応理解することができる。この菩提道灯は、アティーシ
ャが一〇四二年に入蔵し西チベットに三年間滞在した間
にチャンチュブオエ (Byan chub hod) 王に請われて著
作したもので、アティーシャの教学の基礎を示すもので
あり、後述するツォンカバによって承け継がれることに
なるから、是非とも研究しなければならない。詳細に知
ろうと思えば、第一代パンチュンラマの作である「菩提

道灯の釈説、卓越笑の賀宴」(大谷西藏文献目録 No. 10416;
東北蔵外 No. 5941) を読む必要がある。また、小部集の
中の顕教に関する短かいものは理解し易いものが多いか
ら、顕教より始めて次第に密教の著作を手がけてゆくべ
きであろう。

やがてチベット佛教は甚だしい墮落に向うが、そこで
宗教的偉人ツォンカバ (Btson kha pa, 1357-1419) が
出て佛教改革を行なう。かれは、菩提道次第と秘密道次
第との二大著作を完成して、ゲルク派 (Dge lugs pa) を
創設した。菩提道次第(大谷影印北京版 No. 6001・誤字や
脱落が多い; 大谷西藏文献目録 No. 10098; 東北蔵外 No. 5392)
は、当時チベット佛教が密教の一角をもつて覆われてい
たのに対して、顕教特に般若中観の重要性を説いたもの
であるが、その直接の所依はアティーシャの菩提道灯で
あるとする。それ故にこの派を「新カードム派」とも呼
ぶのである。この菩提道次第を読むには、その最後の三
分の一である毘鉢舍那章を長尾雅人博士が和訳して「西
蔵佛教研究」(一九五四年・岩波書店) なる立派な成果を出
版していられるから、先ずそれをチベット原文と対照し
て学ぶべきである。そしてツォンカバの文章に馴れてか
ら他の章へもどるのが賢明な方法である。一方、秘密道

次第(大谷影印北京版 No. 6210・誤字や脱落が多い。大谷西藏文献目録 No. 10024・東北蔵外 No. 5281)は、ツォンカバとして、顯密兩教の兼修合一があるべき佛教の姿であるとして更に密教を中心に著作したものであるが、自明の理として密教が優位であるから、最も重要なものであるところが秘密道次第の研究はまだ誰も手をつけていないようである。顯密兩教の兼修合一があるべき姿であるとするから、菩提道次第から秘密道次第へ入るべき必然性が秘密道次第の第一章(序説)に説かれているが、それについて小川一乗氏の研究(大谷学報第四七卷二号)がある。どうか若い方々がこの秘密道次第の大作にとり組んで解明していただきたい。

以上、諸先輩の研究成果をたよりに研究を始める順序を述べた。ところがこれより以外に先輩の成果は殆んどなさそうである。それに反して資料はまさに無尽蔵である。例えば、ゲルク派には、歴代ダライラマやパンチェンラマの全書、ダルマリンチェン(Rgyal tshab Dar ma rin chen)やカイドゥップ(Mkhas grub Dge legs dpal brain po)など高僧の全書等があり、大谷大学や東北大の蔵外文献目録を繙けば一見してその老大きに驚かれるであろう。近年東洋文庫からサキャ派全書が影印版と

して出版せられた。ニンマ派全書はわが国にないが、あるいはどこかの国で出版されるかもしれない。最近インドで影印版で各派の資料が続々と出版されつつある。これら老大な文献は誰も研究の手をつけていないのである。いまここに述べた研究の道しるべは全く各派の入口を遠くから指さした程度に過ぎない。

しかしながら、文献の数量と教義の難解さに恐れをなしては、いつまでも放置しておかねばならない。たとい先輩の研究成果は少くとも、先ずそれをたよりにチベット原文と対照しつつ第一歩から踏み出すより致し方がない。その間に辞書にない単語をカードに書きとめて意味をつけておく労を忘れてはならない。そのカードは、先人未見の文献を読む際に、あたかもヒマラヤに登るとき道具や装備のような役目をしてくれるであろう。いかえれば、自分で辞書をつくりながら進まねばならない。更にまたチベット人の学者に会う好機があれば、登山における道案内者を得たことになるから、難解な点を充分指導してもらおうのが最も近道である。このようにあらゆる努力が必要であるが、不屈の精神をもって研究していただくことを念願する。

四、チベット言語学の研究

上に述べて来た三つの研究分野は、いずれもチベット語で書かれた文献を対象とする。「チベット文献学」ともいうべきものである。それに対してチベット語の言語体系自体の分析と記述を目標とする「チベット言語学」なる分野が存在する。本稿はチベット文献を研究することに重点をおいて述べるのが目的であるから、少しそれるけれども西田龍雄氏の研究成果によって簡単に記すとチベット言語学には次の三分野を考えることができる。

- 1、記述的研究——現代チベット語諸方言について、音韻・文法・語彙の各体系を分析し記述する。
- 2、歴史的研究——チベット文語と口語の史的発展をあとづける。
- 3、比較研究と再構成——数個の方言を比較し、史的

発展を考慮して、共通チベット語形式を再構成する。ところが、現在の段階では、この中のいずれの分野もよく研究されているとはいえないが、近年東洋文庫において北村甫氏と西田龍雄氏が、直接チベット人について詳細な共同研究を進めていられるから、やがて何らかの立派な成果を発表されるだろう。参考のため既に出版せら

れているものを紹介すると、口語の文法及び辞典として

C. A. Bell : "Grammar of Colloquial Tibetan.

Bengal, Third Edition, 1939."

C. A. Bell : "English-Tibetan Colloquial Dictionary.

Calcutta, Second Edition, 1920."

がある。これらは著作年代が古く、更に進歩したものが期待されているが一応の手がかりにはなろう。またラサ方言の学習書として、

George N. Roerich & Tse-trung Lopsang Phuntshok

: "Textbook of Colloquial Tibetan (Dialect of

Central Tibet). West Bengal, 1957."

Kun Chang & Betty Shefts : "A Manual of Spoken

Tibetan (Lhasa Dialect). Seattle, 1964."

Melvyn C. Goldstein & Nawang Norrang : "Modern

Spoken Tibetan : Lhasa Dialect. Seattle, 1970."

がある。またチベット東北のナムド方言の研究として

Georges de Roerich : "Le parler de l'Amdo. Rome.

1958."

があって、口語の研究は次第に緒についてきたように思われる。

さて、最後に注目すべきは、この言語学の分野でも全

く文献を必要としないのではない。その点に着目した Jacques Bacot は、チベット文法研究の成果として、「Les Stokas Grammaticaux de Thonmi Sambhoja. Paris, 1928.」を刊行した。この書は、第一八世紀のカイブツパムバ (Mikhas grub dan pa) の著作である「三十・性入本典善説宝鬘」の原文とそのフランス訳並びに詳細な脚註を付した力作である。従来のチベット語文法書は、印欧語の文法の構成を模倣したものであったが、印欧語と根本的に相違したチベット語の文法を組み立てるためにはチベット人自身の手になる古典文法論にまで溯って探究しなければならないことを知らしめた画期的なものである。

チベットの文法学は、第七世紀の初頃に王の命によってトンミサムブホータ (Thon mi sam bho ta) がインドへ派遣され、文字と文法学を学んで帰国し、チベット文字を作り八部の文法書を著わしたと伝えられる。その中の「三十」と「性入」の二部が現存し、この二部を基として今日に至るまで多くの文法書が著作された。その文法学の発達の概要は、拙著「チベット語古典文法学」の序論に述べたから、ここには省略する。

そこで古典文法文献を研究しようとする人は、もちろん

んトンミの文法書から著作年代順に読んでゆけばよいのであるが、先輩の成果を先に利用するのが得策であるとすれば、和訳としては、法賢 (Dharmabhadra) の「シツ註の講義」(拙著「チベット語古典文法学」昭和二九年初版本に所収、改定版本には省いたが改定版の続篇に更に性入の和訳も収録する予定)、及び音成就金剛 (Dhyāna can grub pañi rdo rje) の「三十と性入」(故井原徹山訳・佛教研究第六巻一号第七卷一号・大東出版社・昭和一七年一八年)があるから、先ずこれらによって文法術語を知って、次に前掲の Bacot の労作を読むとよくわかるであろう。更に深く研究しようとするば、スムリテイ (Smritijñanakṛti) の「言語の門武器論」(大谷影印北京版 No. 5784; 東北デリゲ版 No. 4295) の中のチベット語文法の部分(北京版 56b, 1. 8 以下)をその註(北京版 No. 5785; デリゲ版 No. 4296)と対照して読むと、主として助辞の用法がよくわかって面白い。次に法護賢 (Dharmapālabhadra) の著「三十の註」(東北蔵外 No. 7071)と「性入を明らかにせる善釈」(東北蔵外 No. 7072)を読まねばならない。そして最後には、チベット文法学を大成したシツ (Si tu) が一七四四年に完成した大著「有雪国の語を正しく綴れる論の部門たる三十頌と性入との宗典釈・賢者の胸莊嚴真珠麗鬘」

(大谷西藏文献目録 No. 11823; 東北蔵外 No. 7057) と取り組まねばならない。このシツ註と直前の法護賢註との間には、特に性入における解釈が相当相異している。これらの文献の翻訳や研究はまだ発表されていない。わたくしは大略読んだので、何とかして少しずつでも発表していきたいと思っている。(法護賢の「三十の註」の和訳は近く大谷学報に掲載の予定)

む す び

以上、チベット文献研究の四分野について述べた。なおこれ以外に、文学・因明・暦学・医学薬学などの研究分野があるが、いずれも殆んど未開拓である。これらにも研究の手を伸ばされんことを望む。

最後に、注意していただきたいことは、上述の四分野のいずれれを選ばれるにしてもチベット文献だけで終始しては大成しないかもしれないことである。すなわち、第一と第三の分野であれば、従来行なわれている佛教学を身につけつつチベット文献を研究しなければならぬ。第二のチベット史研究の分野であれば東洋史を知らねばならない。第四のチベット言語学研究の分野であれば、一般の言語学を研究した上でなければならぬ。何とな

れば、既に発達した佛教学・東洋史学・言語学の研究手法とそれより得た知識をもってチベット文献を読まねばならないからである。しっかりした研究方法をもって臨まなければ、学問研究にならず学問的な立派な成果を得られないことになるであらう。

それでは、チベット学をやるには、例えばチベット語だけでは駄目で、印欧語あるいは漢文をマスターしなければならぬし、また先人の成果が少いから、苦勞が多くて甚だ損な学問ではないかといわれるかもしれない。実際のところその通りである。このような道を長年歩いて来たわたくしは、時には闇の中を手さぐりで進んだり、時にはまわり道をしたり、苦勞や損ばかりしている間に、気がついてみると頭は白髪の方が多くなってしまった。ふりかえてみると、どう考えても楽しんで得るところの多い学問とは思えない。しかしながら、先人未見のチベット文献を苦勞しながら読んで、従来学界で未解決とされていたことを解明したときの壮快さは何ものにもたとえられない。あたかも高山の頂を征服したような思いがする。たとい苦勞が多くとも、このチベット学の分野に挑戦されるよう望んでやまない。